

Fr. RABELAIS : 動詞の叙法

中 川 良 雄

は じ め に

フランスの16世紀は、一般にルネサンスと呼ばれる。この時期には、ギリシャ・ラテンの古代文化の研究が復興すると同時に、フランス語の擁護と顕揚の動きが起こる。それまで卑俗な言葉と見なされていたフランス語が、ラテン語に比肩し得る学術語・文学語の地位にまで高揚された訳で、いわばこの時期は、ラテン語とフランス語、あるいは古語法と新語法の抗争期と見ることが出来る。すなわちこの時期のフランス語は、近代フランス語の形成過程を辿る上で、重要な諸問題を提供しているものと思われる。

当時においては、今日のように文法や規範によってまだ明確な規則が定められておらず、言語は画一化されていなかった。つまり、言語は浮動状態であったのだが、動詞叙法の問題についても、絶対的なルールといったものは存在せず、叙法の選択はおのおの作家の好みに委ねられていたのであり、近代フランス語におけるよりも、叙法の使用はずっと自由であった。

本稿においては、中世と現代の中間に位置する16世紀のフランス語において、動詞叙法がいかなる様相を呈していたか、Fr. RABELAIS の作品に例を取り、若干の考察を試みたい。

RABELAIS は、16世紀最大の散文作家とされ、彼のフランス中世の巨人王伝説に取材したところの *Gargantua* と *Pantagruel* の物語は、至上の俗語文学

であり、フランス語史上初の芸術的散文であると評されている。

RABELAIS には数多くの異本文が存在するが、今回テキストとして用いたのは下の刊本である：

Œuvres complètes. tome I-II. "Classique Garnier"

éd. Pierre Jourda ; Paris : Garnier Frères, 1974.

I 独立節中の叙法

ラテン語や古フランス語においては、独立節中で自由に接続法が用いられて、「願望・命令・後悔」など非現実的な事柄を表わすことができた (e. g. *Paulus felix sit!*; *Salvet seiez de Deu!*) が、16世紀、たとえば RABELAIS においても、この独立節中の接続法が、作品の随所に現われている。

1. 「願望」を表わす場合

(1) *Sus, sus (dict Picrochole), qu'on despesche tout, ...*

(*Gargantua*, 33)

(2) *Qu'il n'en soit plus parlé.*

(IV, Prologue.)

16世紀においては、上の(1), (2)のように、独立節中で接続法に置かれた動詞が「願望」を表わす場合、その動詞は *que* を先立たせるのが普通である。ところが、動詞の接続法が強い願望的価値を有している時には、しばしば *que* なしで単独に用いられた¹⁾：

(3) *Tres chiers filz, la paix de Christ, nostre redempteur, soyt avecques toy.*

(*Gargantua*, 29)

(4) *Dieu vous face bien tousjours prosper!*

(*Ibid.*, 33)

(5) *Le feu Saint Antoine le baise.*

(Pantagruel 16)

下表 I は、RABELAIS において、独立節中で「願望」を表わす接続法が、「que と共に用いられる場合」および「que なしで用いられる場合」の調査結果である：

表 I

	que と共に用いられる場合	que なしで用いられる場合
<i>Pantagruel</i>	2	29
<i>Gargantua</i>	9	32
III	4	47
IV	11	54
V		26
他の著作 ²⁾		8
計	26	196

上の表によって、RABELAIS においては、que なしで接続法を用いる統辞が他方を凌駕していることがわかるが、RABELAIS が que と共に接続法を用いるのは、(1), (2)の例のように人称代名詞を主語とする場合であり、que なしで用いるのは、(3), (4), (5)のごとく名詞——しかも Dieu や Christ などの絶対視されている——主語の場合である。

また古フランス語においては、接続法現在が si (<sic) の後に用いられて「願望」を表わすことがあった (e. g. Si m'ait Deus)。このいわば中世的語法は、RABELAIS にも見られる：

(6) Sus, sus (dict Picrochole), qu'on despeche tout, et qui me ayme, si me *suyve*.
(*Gargantua*, 33)

(7) Si tu es de Dieu, sy *parle!*

(Ibid., 35)

上の他, IV, 65に 1 例; *Pantagrueline.*, 1533に 2 例; 合計 5 例。

さらに、pouvoir の接続法現在が「願望」の助動詞として用いられること

がある :

(8) Le Diable le *puisse* emporter !

(III, 25)

(9) ... : le mal que je y pense me *puisse* soudain advenir!

(V, 7)

(8), (9)からもわかるように、主語と助動詞間の倒置は起こらない。たとえば主語が人称代名詞の場合でも、現代フランス語と違って、主語が³⁾後置されないこともある :

(10) Car je *puisse* donc, sauf et sain, retourner de cestuy Hypogée, ...

(V, 35)

ただし、主語が《vous》の場合には主語倒置が起こる :

(11) Jamais ne *puissiez* vous fianter que à sanglades d'estrivieres, ...

(III, Prologue.)

ところで、接続法半過去が現在の事実と反する「非現実的願望」を表わすことがある :

(12) O que pour l'occire præsentement *feust* icy quelque vaillant Perseus!

(IV, 33)

(13) ... : que Belzebus et Astarotz les *eussent conciliés* avecques Proserpine!

(*Ibid.*, 64)

このような半過去は、(12), (13)のように単独で用いられることもあるが、
Pleust à Dieu que (12例), A la mienne volonté que (5例) と共に用いられることが多い :

(14) Pleust à Dieu que j'*eusse* presentement cent soixante et dixhuict million d'or!

(IV, Prologue.)

(15) A la mienne volonté, que je *eusse* maintenant un boucal du meilleur vin ...

(*Pantagruel*, 28)

2. 「命令」を表わす場合

vouloir の接続法現在が助動詞として用いられ、丁寧な「命令」を表わすことがある：

(16) ... : Dieu me le *veuille* pardonner!

(III, 30)

(17) ... (lequel Dieu nous *veuille* longuement conserver), ...

(IV, Monseigneur Odet)

また次の(18)は、独立節中の接続法を命令法同様に用い、et + 直説法単純未来で命令の結果を表わしている：

(18) ... - vous *soubvienne* de boyre à my pour la pareille, et je vous plegeray tout ares metys.

(*Gargantua*, Prologe.)⁴⁾

3. 「譲歩」を表わす場合

独立節中で「譲歩」を表わす接続法は、16世紀においては自由に用いられた。RABELAIS においても、下のごとく見られる：

(19) ... - et je accepte volontiers l'offre, protestant jamais ne vous laisser ; et *alissiez* vous à tous les diables, ...

(*Pantagruel*, 9)

(20) Il dispensoit doncques son temps en telle façon que ordinairement il s'esveilloit entre huyt et neuf heures, *feust* jour ou non ; ...

(*Gargantua*, 21)

II 従属節中の叙法

1. 補足節において

古フランス語では、*croire*, *cuidier*, *penser* 等の「意見・認知」を表わす動詞の後で、好んで接続法が用いられた。⁵⁾ 今日では通常直説法を用いるが、16世紀には両叙法共に可能であった。たとえば RABELAIS において、

(21) Je croy que *c'est* langaige des Antipodes, ...

(*Pantagruel*, 9)

(22) Messieurs, je croy que vous *soyez* faict mal; ...

(*Ibid.*, 25)

(23) Je croy qu'elle n'y *soyt* plus maintenant.

(*Gargantua*, 21)

上の例中、(21)においては、主節の動詞 *croire* には話者の確信が含まれている。それに対し、(22)や(23)には疑惑もしくは皮肉の意味合いが込められている。つまり(21)では、《*je croy que*》は《*je sais que*》に近く、(22)や(23)では、《*je désire que*, *je crains que*》の意味に近くなるため、接続法の使用が可能になる。16世紀には、RABELAIS 以外にも接続法による統辞が頻繁であるが、このように従属節中で、直説法もしくは接続法のいずれかを随時選択することによって、疑惑の度合いを微妙に表現することができる。

さらに、ラテン語においては、「言う・考える・感ずる」等の動詞で引き出された間接話法は不定詞構文となり、従属節中では接続法が用いられた。たとえば、

(24) Ego, inquit Caesar, *pacem vobiscum faciam si sociis nostris satis facietis* (O. R.).

(25) Caesar dixit se *pacem cum illis facturum esse si sociis suis satis facerent* (O. O.).

という具合にである。

RABELAIS の次の文章は、このラテン語の間接話法の模倣によって、従属節中の接続法使用が可能となったものと思われる。

(26) J'ay leu qu'un Philosophe, nommé Petron, estoient en ceste opinion que feussent plusieurs mondes soy touchans les uns les aultres, ...

(IV, 55)

上の例で、《... que feussent plusieurs mondes...》は、《qu'un Philosophe (...) estoient en ceste opinion》の従文であり、従って後者と共に《j'ai leu》に従属している。つまり、「いくつもの世界が...であること」は、「ペトロンという哲人が...という意見だった」と同じく、話者（私）の意見（経験）の内容であって、共に間接話法の内容なのである。話者の主張は、《j'ay leu》の部分だけであって、《qu'un Philosophe (...) les uns les aultres》は真偽にかかわらず、話者（私）が「過去に読んだ」記憶（経験）として伝達されているにすぎない。すなわち、間接話法中に接続法を使用することによって、非断定的な態度が表わされている。換言すれば、主節の内容には何らかの疑惑が含まれていることになる。

同様の問題が、間接疑問文中の叙法についても見られる。間接疑問文の従属節中で、しばしば接続法が用いられる：

(27) Mais, au reste, je ne sçay quoy premier en luy je *doive* admirer, ...

(Gargantua, 9)

(28) ..., je ne voy point comment ce *soit* à notre ruyne totale.

(Ibid., 47)

(27), (28)からもわかるように、RABELAIS が間接疑問文中で接続法を用いるのは、主節の動詞が否定辞を伴う時、つまり主節中に疑惑の含まれる時である。主節が肯定の時には、次の(29)のように直説法が用いられる：

(29) On luy demanda si jamais elle *avoit eu* affaire à homme; ...

(III, 35)

主節中に疑惑が含まれる時、間接疑問文の従属節中の動詞が接続法に置かれ

ることは、次の(30), (31)を見れば了解できる：

(30) Je le croy si avant, j'entre en doute s'il *eust voulu* que l'occasion d'un si bel exploit luy fust ostée.

(MONTAIGNE, *Essais*, II, 11)

(31) Il est incertain où la mort nous *attende*, attendons la partout.

(*Ibid.*, 20)

なお RABELAIS においては、従属節中の動詞は、*devoir* (*Gargantua*, 9; III, 31; 48; IV, Prologue.: 合計 4 例) と *être* (*Gargantua*, 47; III, 48; IV, Ancien prologue.; 53; 合計 4 例) に限られている。

この統辞は、間接疑問文で接続法を要求するラテン語 (*e. g. Quid facis? → Me rogat quid faciam.*) の模倣である。上例において示したように、接続法が使用され始めたのは16世紀からで、17世紀にも時おり接続法による統辞が見られた。⁶⁾

ところで、これまで述べて来たのとは逆に、今日のフランス語が接続法を用いるところに、直説法を用いた例も見られる。

16世紀——とりわけ前半——においては、「満足・驚き・残念・不安・悲哀・悔恨」等の「感情」を表わす動詞に続く従属節中で、今日のフランス語のように接続法は一般化されておらず、RABELAIS にも直説法が見られる：

(32) Dieu soit loué que vous *estes venu*,

(*Gargantua*, 33)

(33) Je regrette de tout mon cueur que n'*est* icy Picrochole, ...

(*Ibid.*, 50)

ラテン語では、*me miseret*, *me paenitet* 等の「感情」を表わす動詞と共に用いられた「原因」を表わす接続詞 *quod* は、後に直説法を取った (*e. g. Me miseret quod vades.*)。このように、フランス語で古くは直説法を用いたのも、

ラテン語の継続と思われるが、上の(32), (33)においても、接続詞 *que* にはラテン語の *quod* が含んでいた「原因」の意味合いが保たれている。つまり、話者が斯く斯くの感情を抱き得る理由が、従属節中の直説法によって事実として呈示され、その事実についての感想が主節中に示されているのである。接続法による統辞に疑惑が含まれるのに対して、出来事の現実味を強調したいがための直説法の使用と考えられる。

「感情」を表わす動詞の後で、今日のフランス語のように接続法が用いられ始めるのは、16世紀末になってからのことである。⁷⁾ たとえば MONTAIGNE において、

(34) Je plains qu'on n'aye *suyvy* un train que jay veu commencer à l'exemple des Roys: ...

(*Op. cit.*, III, 13)

(35) C'est injustice de se douloir qu'il *soit advenu* à quelqu'un ce qui peut advenir à chacun. ...

(*Loc. cit.*)

2. 副詞節において

16世紀においては、接続詞 *comme* が *lorsque* と同義に用いられて「時」を示す場合、接続法を従えることがあった:

(36) Le lendemain, comme les Tribuns du peuple le *tirassent* en jugement, et *proposassent* leur accusation contre luy, il pria Ciceron de le vouloir patiemment ouïr: ...

(AMYOT, *Ciceron*, 4)

(37) ...; car si je fusse party le soir, comme j'*eusse fait* sans ce que me dict monsieur de Saint-Paul, ...

(MONLUC, *Commentaires*, 5)

このように *comme* の後に接続法を用いるのは、ラテン語からの誤った模

倣である。つまり、comme の語源は実際には quomodo であるにもかかわらず、誤って接続法過去や過去完了と共に用いる cum⁸⁾ であると解釈したために生じた偽ラテン語法である。

ここで注目しなければならないことは、RABELAIS が一度も接続法による統辞を用いていないことである。RABELAIS では、(38)および(39)に示すように、直説法半過去もしくは直説法前過去が用いられている：

(38) Et comme elles [les saiges femmes] caquetoient de ces menuz propos entre elles, voicy sortir Pantagruel, ...

(*Pantagruel*, 2)

上の他、*Pantagruel*; 8; 30; *Gargantua*, 38; 合計 4 例。

(39) Comme ils eurent prins terre, Epistement qui admiroit l'assiette du lieu et l'estrangeté des rochiers advisa quelques habitans du pays.

(V, 16)

上述のごとく、RABELAIS では「時」を表わす接続詞 comme が、接続法と共に用いられることはないが、comme が「原因・理由」を示す時、後に接続法の用いられることがある：

(40) Lequel, comme luy eust fatalement esté par les vaticinateurs predict qu'en certain jour il mourroit par ruine de quelque chose qui tomberoit sus luy, (...), s'estoit de la ville, (...) esloigné, ...

(IV, 17)

また、jusqu'à ce que, tant que およびそれに類する接続詞句の後で、直説法の用いられることがある。RABELAIS の場合、過去の事実について語る時、直説法過去時称が用いられる：

(41) ..., et ont joué du serrecropiere à cul levé à tous venans jusques à ce que on n'en a plus voulu; ...

(Pantagruel, 17)

④② ..., et par outrecuidance se hazarda plus que devant, jusques à ce que Gargantua s'escrya : ...

(Gargantua, 48)

また、未来の出来事に関する場合には、接続法あるいは直説法単純未来が用いられる：

④③ Jusques à ce que nous les *ayez rendues*, nous ne cesserons de crier après vous...

(Gargantua, 19)

④④ Mais (dist le moyne) le service du vin, faisons tant qu'il ne *soit* troublé ;...

(Ibid., 27)

④⑤ ..., je ordonne et veux que Ponocrates sont sus tous ses gouverneurs entendant avec auctorité à ce requise, et assidu avecques l'enfant jusques à ce qu'il le *congnoustra* idoine de povoir par soy regir et regner.

(Ibid., 50)

この統辞においても、接続法には何らかの疑惑が含まれていること、逆に直説法が出来事の現実性を強調しているのがわかる。つまり、未来において起こり得るであろうことは現実性が希薄で、非断定的であるため接続法となり、過去において経験された断定的事実を呈示するには、直説法が用いられていることが了解できる。

Ⅲ 仮定文中の叙法

ラテン語では、想像上の仮定や事実と反する仮定を表わす時、条件節・主節の両方に接続法が用いられた。ラテン語は、直説法・接続法・命令法の3つの叙法を持つのみで、仮定を表わすには、接続法が今日のフランス語の条件法の役割を果たした訳である。

古フランス語でも、接続法による統辞は普通に用いられ、非現実的の假定を表わし得た。現代フランス語に見られる假定構文 (Si+直説法半過去・大過去+条件法) は、すでに12世紀に現われ⁹⁾、それ以降、条件節・主節にさまざまな組み合わせが可能になった。16世紀には、すでに現代フランス語に見られる統辞が優勢であるものの、接続法を用いた古い統辞も依然見られ、現在あるいは過去における非現実的の假定を表わしている。

Si で始まる假定文だけに限ると、RABELAIS では次の組み合わせが可能となる¹⁰⁾。

(49) Si+接続法大過去+接続法大過去 (19例) ——過去における假定

J'advoue Dieu, si j'eusse esté au temps de Jesus-christ, j'eusse bien engardé que les Juifs ne l'eussent prins au jardin de Olivet.

(Gargantua, 39)

(50) Si+接続法大過去+条件法現在 (3例) ——過去をもとにして假定を立て、その結果を現在において推測

Si c'eust esté un grand Diable, il y auroit à penser.

(IV, 47)

(51) Si+接続法半過去+接続法半過去 (3例) ——現在の事実に反する假定

O, compaing, si je montasse aussi bien comme je avalue, je feusse desjà au dessus la sphere de la lune avecques Empedocles!

(Pantagruel, 14)

(52) Si+接続法半過去+条件法現在 (5例) ——51)と同様の假定

...; dea! si j'osasse jurer quelque petit coup en cappe, cela me soulageroit d'autant!

(III, 36)

(53) Si+直説法半過去+条件法現在 (71例) ——同上の假定

Si je y *allois*, le Diable me *emporteroit*.

(*Ibid.*, 23)

54) Si+直説法半過去+接続法半過去 (7例) —— 同上の仮定

Si je *montois* aussi bien comme j'*avalle*, je *feusse* pieça hault en l'aer.

(*Gargantua*, 5)

55) Si+直説法半過去+接続法大過去 (4例) —— 現在の事実と反する過去における推測

...; s'ilz la *perdoient*, *c'eust esté* honte de demander,...

(IV, 8)

56) Si+直説法大過去+条件法現在 (3例) —— 50と同様の仮定

...: si j'*avoys* en ceste bouteille *mis* deux cotyles de vin et une d'eau, ensemble bien fort meslez, comment les *demanderiez* vous?

(III, 52)

57) Si+直説法大過去+接続法半過去 (1例) —— 50, 56と同様の仮定

Encores plus bravement se vanthoit Asclepiades, medecin, avoir avecques Fortune convenu en ceste paction, que medecin reputé ne *feust*, si malade *avoit esté* depuis le temps qu'il commença practiquer en l'art jusques à sa derniere vieillesse.

(IV, Prologue.)

以上のように、RABELAIS における *si* で始まる仮定文の形態には、9種類の組み合わせが可能である。これらの組み合わせを表にまとめると、表II・表IIIのようになる。

下の2表を参照すれば、次のことがわかる。

a) すでに現在最も普通に用いられている仮定文の形態53, 56が勝利を取めている。しかし、なお接続法を用いた古い形態も多く用いられている。

b) 「現在の事実と反する仮定」を表わすには、Si+直説法半過去+条件法

表 II

主 節 Si 従属節	条件法	条件法	接続法	接続法	計
	現在	過去	半過去	大過去	
直説法半過去	71		7	4	82
直説法大過去	3		1		4
接続法半過去	5		3		8
接続法大過去	3			19	22
計	82		11	23	116

表 III

	主 節		従 属 節	
	条件法	接続法	直説法 半過去・大過去	接続法
<i>Pantagruel</i>	14	7	16	5
<i>Gargantua</i>	14	5	15	4
Ⅲ	28	9	26	11
Ⅳ	18	9	18	9
Ⅴ	8	4	11	1
他の著作				
計	82	34	86	30
比 率 (%)	70.7	29.3	74.1	25.9

現在の組み合わせが最も多く用いられる。

c) 「過去の事実に対する仮定」を表わす時に用いられるのは、Si+接続法大過去+接続法大過去の組み合わせのみである。

d) 「過去をもとにして仮定を立て、その結果を現在において推測」する場合に用いられるのは、(5), (6), (7)の3通りである。

e) 「現在の事実に対する過去における推測」を表わすには、Si+直説法半過去+接続法大過去の組み合わせが用いられる。

以上に見た組み合わせの他に、Si+直説法半過去+接続法現在の組み合わせが見られる：

58) ..., et, si j'estois roy de Paris, le diable m'emport¹¹⁾ si je ne metoys le feu dedans et faisoyz brusler et regens qui endurent ceste inhumanité devant leurs yeulx estre exercée!

(Gargantua, 37)

また、si 従属節中に条件法を用いた構文は、1例のみ見られた：

59) ..., S'on les pourroit réduire à cicatrice Par tel moien que plus n'eussent la tous, Veu qu'il sembloit impertinent à tous Les veoir ainsi à chascun vent baisler; ...

(Ibid., 2)

従属節を従えている接続詞 si が、第2の従属節の前で que によって代用される時、その後の動詞は接続法に置かれる。これは、61)のように que が現われない場合でも同じである：

60) ...; si par cas il estoit devenu furieux et que, pour luy rehabilliter son cerveau, et me l'eusse icy envoyé, ...

(Gargantua, 28)

61) Si nous estions du temps de Sylla, Marius, Cæsar, et aultres romains empe-reurs, ou du temps de nos antiques druydes, (...) et voulussiez les cendres de vos femmes ou peres boyre en infusion de quelque bon vin blanc, ...

(III, 52)

仮定文で接続法を用いるのは、既述のごとく古フランス語では普通であったが、2つの仮定が続く場合、2度目の si (se) が現われても、接続法が用いられた。上の2つの例では、第1の仮定のみが現代フランス語で普通に見られる統辞に置き換えられ、第2の仮定では、依然として接続法が使用されている。また、次に掲げるのは、si を繰り返し、接続法を続けた例である：

62) Si quelque tort *eust esté* par nous fait en tes subjectz et domaines, si par nous *eust esté* porté faveur à tes mal vouluz, si en tes affaires ne te *eussions secouru*, si par nous ton nom et honneur *eust esté* blessé, ou, pour mieulx dire, si l'esperit calumnieur, tentant à mal te tirer, *eust* par fallaces especes et phantasmes ludificatoyses *mis* en ton entendement...

(*Gargantua*, 31)

上のごとく、仮定を表わす *si* の後に接続法が用いられるのと同様に、仮定的事実との比較を表わす *comme si* の後でも接続法は多用される：

63) Et tous ces bonnes gens rendoyent la leurs gorges devant tout le monde, *comme s'ilz eussent escorché* le renard : ...

(*Pantagruel*, 16)

64) Par tous les champs es quelz ils pissent, le bled y provient *comme si Dieu y eust pissé*.

(IV, 7)

接続法が用いられない場合には、現代フランス語と同じく、直説法半過去もしくは大過去が使用されるが、下表 IV は、RABELAIS における *comme si* の後での叙法の実例数である。

表 IV

	接 続 法	直説法 {半過去 大過去
<i>Pantagruel</i>	8	3
<i>Gargantua</i>	3	2
III	4	5
IV	25	1
V	7	5
他の著作		3
計	47	19

上の表により、RABELAIS においては、*comme si* の後で直説法よりも接続法が好まれており、彼が古い統辞に準拠していることがわかる。なお、数値上

の両者の差違は、*Le Quart Livre* において顕著である¹²⁾。

この統辞においても、直説法よりも接続法を用いた方がうまく説明がつく。つまり、*comme si* ~ (あたかも~のように) は、非断定的・仮定的な事柄を表わし、そこにはなにがしかの疑惑が含まれている。

さらに、2つの比較が続く時、最初に *comme si* の後に直説法を用い、次に *comme si* を *comme* で代用させた後、接続法を用いた例が1例現われる：

- (67) ..., *comme si l'on vous fiansoit*, et *comme premierement feustes fiansez*
(IV, 12)

む す び

フランスの16世紀に一般的に見られる傾向の一つとして、「フランス語の擁護と顕揚」の動きが挙げられるが、その運動の中心となったのは、RABELAIS はじめ当時の人文主義者であった。ラテン語の模倣によって、フランス語をより《noble》、より《élégant》なものにしようとするのが彼らの務めであったが、RABELAIS に関する限り、ラテン語を移入するには、単なる「ラテン語まがい」(escorche-Latin) ではなく、そのラテン語を完全に消化した後でなければならなかった。

この意見は、「時」を表わす従位接続詞 *comme* の後に接続法を用いる偽ラテン語法に対する非寛容的な態度となって現われている。またこの態度は、*Pantagruel* の第6章で、主人公 *Pantagruel* がパリを散歩している途中、リモージュ出身の学生に出会い、*Pantagruel* の問いに、その学生がラテン語まがいのフランス語で、ちんぷんかんぷんの言葉を話す箇所があるが、その場面を面白おかしく描き出し、そうした行為を嘲笑していることにも共通している。

また今日のフランス語では、叙法の用い方が文法化・規則化されているのに対し、RABELAIS の場合、叙法の決定は現代フランス語におけるよりもはるかに機能主義的である。つまり、文意に何らかの疑惑を含ませたい時に接続法を用いて断定緩和を表わすことができ、事実の断定には直説法が用いられて、「感情」を表わす動詞の後や、*jusqu'à ce que* 等の接続詞句が、過去の事実に係わる時などのように、現実の内容を事実として呈示することができる。

本来、直説法とは、「行為を現実のものとして表わす法」であり、接続法は、「頭の中で考えられた動作・状態を表わす主観的・感情的法」¹³⁾である故、前者は断定的、後者は非断定的な事柄を表わし得るが、この法の定義に RABELAIS の慣用ほど明確に合致するものはない。

さらに、16世紀、殊に前半期のフランス語は、中世的統辭を脱して、近代フランス語の形成に向かう過渡期にあたるが、当時の著作家の文体には、故意に擬古文化 (*archaïser*) しようとする意図と、近代化 (*moderniser*) しようとする意図が併存する。今回考察してきた RABELAIS における動詞叙法の問題については、概して前者、つまり中世的統辭に回帰しようとする好みが顕著に現われている。そもそも彼の物語自体が、フランス中世の巨人王伝説に深く根ざしていることを改めて認識しておく必要がある。

註

- 1) Nyrop, t. VI, p. 310.
- 2) テキストとして使用した Garnier 版に収録のもの: *Epistre de maistre François Rabelloys, à Bouchet; Pantagrueline prognostication pour l'an perpetuel; Almanache de 1533; Almanache de 1535; Lettres écrites de Rome (décembre 1533-février 1536); Lettres à Antoine Hullot; Lettre au cardinal du Bellays; La Sciomachie et festins; Pantagrueline prognostication pour l'an 1533.* をさす。
- 3) 現代フランス語では、下のように主語後置が起こる:
Puissent vos projets réussir
Puissé-je réussir!

(Brunot, *La pensée.*, p. 572)

- 4) テキストとして使用した Garnier 版による綴りに従った。他の版では、〈Prologue〉となっている。
- 5) Brunot-Bruneau, p. 321.
- 6) Haase, p. 178.
- 7) Togeby, p. 179.
- 8) ラテン語では、cum が単純な「時」を表わす場合や、「～する時はいつでも…」の意味を持つ時には、後に直説法が用いられる：
Pater meus, cum otiosus est, poetas legit.
しかし、過去の多少連続的な動作や過去の他の出来事を示す場合には、接続法を取る：
Caesar, cum id nuntiatum esset, in Galliam contendit.
- 9) Grevisse, p. 1110; Haase, p. 159.
- 10) 以下の例文の列挙および図表の作成については、Wagner が示した方法に従った。
- 11) emporter の接続法現在 3 人称単数。「願望」を表わす。
- 12) この他にも、*Le Quart Livre* には、意識的に古語法を用いた統辞がしばしば見られる。
- 13) 朝倉, p. 184, p. 343.

調査に用いたテキスト

AMYOT, Jacques. *Les vies des hommes illustres grecs et romains, Demosthenes et Cicéron.* “Société des textes français modernes” éd. Jean Normand; Paris: Hachette, 1929.

———. *Les vies des hommes illustres grecs et romains, Péricles et Fabius maximus.* “Société des textes français modernes” éd. Louis Clément; Paris: E. Droz, 1934.

Conteurs français du XVIe siècle “Bibliothèque de la Pléiade” éd. Pierre Jourda; Belgique: Gallimard, 1965.

MONLUC, Blaise de. *Commentaires.* “Bibliothèque de la Pléiade”; Belgique: Gallimard, 1964.

MONTAIGNE, Michel Eyquem de. *Essais.* 2 vols. “Classique Garnier” éd. Maurice Rat; Paris: Garnier Frères, 1974.

NAVARRÉ, Marguerite de. *L'Heptaméron.* “Classique Garnier” éd. Michel François; Paris: Garnier Frères, 1972.

RABELAIS, François. *Œuvres complètes.* 2 vols. “Classique Garnier”

éd. Pierre Jourda ; Paris : Garnier Frères, 1974.

主要参考文献

- HANDFORD, S. A. *The latin subjunctive Its Usage and Development from Plautus to Tacitus*. London : Methuen, 1947.
- BRUNOT, Ferdinand. *Histoire de la langue française, des origines à nos jours*. vols. I-III. Paris : Armand Colin, 1967.
- . *La pensée et la langue*. 2e éd. ; Paris : Masson, 1926.
- BRUNOT, Ferdinand et Charles Bruneau. *Précis de grammaire historique de la langue française*. 3e éd. ; Paris : Masson, 1969.
- GOUGENHEIM, Georges. *Grammaire de la langue française du seizième siècle*. "Collection Connaissance des langues" ; Paris : A. & J. Picard, 1974.
- GREVISSE, Maurice. *Le bon usage*. 9e éd. ; Belgique : J. Duculot, S. A. et Gremloux, 1969.
- HAASE, A. *Syntaxe française du XVIIe siècle*, nouvelle éd. ; Paris : Delagrave, 1975.
- HUGUET, Edmond. *Etudes sur la syntaxe de Rabelais comparée à celle des autres prosateurs de 1450 à 1550*. Genève : Slatkine reprints, 1967.
- NYROP, Kristoffer. *Grammaire historique de la langue française*. 5e éd. ; 6 vols. Denmark : Gyldendal, 1968.
- TOGEBY, Knud. *Précis historique de grammaire française*. Copenhagen : Akademisk Forlag, 1974.
- WAGNER, Robert-Léon. *Les phrases hypothétiques commençant par «si» dans la langue française, des origines à la fin du XVIe siècle*. Paris : Droz, 1939.
- 朝倉季雄. 『フランス文法事典』 ; 白水社, 1973.